

談懷追作女処

石漱目夏

庫文空青

私の処女作——と言え^まば先ず『猫』だろうが、別に追懐する程のことでもないようだ。ただ偶然ああいふものが出来たので、私はそういう時機に達して居たというまでである。

というのが、もともと私には何をしなければならぬということがなかった。勿論^{もちろん}生きて居るから何かしなければならぬ。する以上は、自己の存在を確実にし、此処^{ここ}に個人があるということ^を他にも知らせねばならぬ位の了見^{りようけん}は、常人と同じ様に持っていたかも知れぬ。けれども創作の方面で自己を発揮しようとは、創作をやる前迄も別段考えていなかった。

話が自分の経歴見たようなものになるが、丁度^{ちょうど}私が大学を出てから間もなくのこと、或日外山正一氏から一寸^{ちよつと}来いと言つて来たので、行つて見ると、教師をやつて見てはどうかということである。私は別にやつて見たいともやつて見たくないとも思つて居なかつたが、そう言われて見ると、またやつて見る気がないでもない。それで兎^とに角^{かく}やつて見ようと思つてそういうと、外山さんは私を嘉納さんのところへやつた。嘉納さんは高等師範の校長である。其処^{そこ}へ行つて先ず^ま話を聴いて見ると、嘉納さんは非常に高いことを言う。教育の事業はどうとか、教育者はどうなければならぬとか、逆^{とて}も我々にはやれそうにも

ない。今なら話を三分の一に聴いて仕事も三分の一位で済まして置くが、その時分は馬鹿正直だったので、そうは行かなかつた。そこで逆も私には出来ませんと断ると、嘉納さんが旨い事をいう。あなたの辞退するのを見て益依頼し度くなつたから、兎に角やれるだけやってくれとのことであつた。そう言われて見ると、私の性質として又断り切れず、とうとう高等師範に勤めることになつた。それが私のライフのスタートであつた。

茲で一寸話が戻りをするが、私も十五六歳の頃は、漢書や小説などを読んで文学というものを面白く感じ、自分もやって見ようという気がしたので、それを亡くなつた兄に話して見ると、兄は文学は職業にやならない、アツコンプリッシメントに過ぎないものだと言つて、寧ろ私を叱つた。然しよく考えて見るに、自分は何か趣味を持った職業に従事して見たい。それと同時にその仕事が何か世間に必要なものでなければならぬ。何故というのに、困つたことには自分はどうも変物である。当時変物の意義はよく知らなかつた。然し変物を以て自ら任じていたと見えて、逆も一々此方から世の中に度を合せて行くことは出来ない。何か己を曲げずして趣味を持った、世の中に欠くべからざる仕事がありそうなものだ。——と、その時分私の眼に映つたのは、今も駿河台に病院を持つて居る佐々木博士の養父だとかいう、佐々木東洋という人だ。あの人は誰もよく知つて居る変人だが、

世間はあの人を必要として居る。而もあの人^{しか}は己を曲ぐることなくして立派にやうて行く。それから井上達也という眼科の医者^{やはり}が矢張駿河台に居たが、その人も丁度^{ちようど}東洋さんのような変人で、而も世間から必要とせられて居た。そこで私は自分もどうかあんな風にえらくなうてやうて行きたいものと思つたのである。ところが私は医者^{きし}は嫌いだ。どうか医者でなくて何か好い仕事がありそうなものと考えて日を送つて居るうちに、ふと建築のことに思い当つた。建築ならば衣食住の一つで世の中になくて叶^{かな}わぬのみか、同時に立派な美術である。趣味があると共に必要なものである。で、私はいよいよそれにしようと思つた。

ところが丁度その時分（高等学校）の同級生に、米山保三郎という友人が居た。それこそ真性変物で、常に宇宙がどうの、人生がどうのと、大きなことばかり言つて居る。ある日此男^{たす}が訪ねて来て、例の如く色々哲学者の名前を聞かされた揚句^{あげく}の果^{はて}に君は何になると尋ねるから、実はこうこうだと話すと、彼は一も二もなくそれを却^{しりぞ}けてしまった。其時かれは日本でどんなに腕^{うで}を揮つたつて、セント・ポールズの大寺院のような建築を天下後世に残すことは出来ないじやないかとか何とか言つて、盛んなる大議論を吐いた。そしてそれよりもまだ文学の方が生命があると言つた。元来自分の考は此男の説よりも、ずっと實際的である。食ふということを中心として出立した考である。所が米山の説を聞いて見

ると、何だか空々くうくうばく漠々とはしているが、大きい事は大きいに違ない。衣食問題などは丸で眼中に置いていない。自分はこれに敬服した。そう言われて見るとなるほど成程又そうでもあると、其晩即席に自説を撤回して、又文学者になる事に一決した。随分呑氣のんきなものである。

然し漢文科や国文科の方はやりたくない。そこで愈英文科を志望学科と定めた。

然し其時分の志望は実に茫漠ぼうぼくきわ極まったもので、ただ英語英文に通達して、外国語でえらい文学上の述作をやつて、西洋人を驚かせようという希望を抱いていた。所が愈大学へ這入はいつて三年を過して居るうちに、段々其希望があやしくなつて来て、卒業したときには、是これでも学士かと思ふ様な馬鹿が出来上つた。それでも点数がよかつたので、人は存外信用してくれた。自分も世間へ対しては多少得意であつた。ただ自分が自分に対すると甚はなはだ氣の毒であつた。そのうち愚図ぐずぐず々々しているうちに、この己れに対する氣の毒が凝結し始めて、体ていのいい往生レンジネーションとなつた。わるく云えば立ち腐れを甘んずる様になつた。其そのく癡世間せへ対しては甚はなはだ氣が高い。何の高山の林公抔なづと思つていた。

その中、洋行しないかということだったので、自分なんぞよりももつとどうかした人があるだろうから、そんな人を遣やつたらよかろうと言うと、まアそんなに言わなくても行つ

て見たら可いだろうとのことだったので、そんなら行つて見ても可いと思つて行つた。然し留学中に段々文学がいやになつた。西洋の詩などのあるものをよむと、全く感じない。それを無理に嬉^{うれ}しがるのは、何だかありもしない翅^{つばさ}を生やして飛んでる人のような、金がないのにあるような顔して歩いて居る人のような気がしてならなかった。所へ池田菊苗君が独^{ドイツ}乙から来て、自分の下宿へ留つた。池田君は理学者だけれども、話して見ると偉い哲学者であつたには驚いた。大分議論をやつて大分やられた事を今に記憶している。倫敦^{ロンドン}で池田君に逢^あつたのは、自分には大變な利益であつた。御蔭^{おかげ}で幽霊の様な文学をやめて、もつと組織だつたどつしりした研究をやるうと思ひ始めた。それから其方針で少しやつて、全部の計画は日本でやり上げる積^{つも}で西洋から歸つて来ると、大学に教えてはどうかということだったので、そんならそうしようと言つて大学に出ることになった。(是^{これ}も今云つた自分の研究にはならないから、最初は断つたのである。)

さて正岡子規君とは元からの友人であつたので、私が倫敦^{ロンドン}に居る時、正岡に下宿で閉口した模様を手紙にかいて送ると、正岡はそれを『ホトトギス』に載^のせた。『ホトトギス』とは元から關係があつたが、それが近因で、私が日本に歸つた時(正岡はもう死んで居た)編輯^{へんしゅう}者の虚子から何か書いて呉^くれないかと囑^{たの}まれたので、始めて『吾輩は猫である』

というのを書いた。所が虚子がそれを讀んで、これは不可いませんと云う。訳を聞いて見ると段々ある。今は丸まるで忘れて仕舞しまつたが、兎とに角かもつと尤もだと思つて書き直した。

今度は虚子が大いに賞ほめてそれを『ホトトギス』に載せたが、実はそれ一回きりのつもりだったのだ。ところが虚子が面白いから続きを書けというので、だんだん書いて居るうちにあんなに長くなつて了しまつた。というような訳だから、私はただ偶然そんなものを書いたというだけで、別に当時の文壇に対してどうこうという考も何もなかった。ただ書きたいから書いたから作つたまでで、つまり言えば、私がああいう時機に達して居たのである。もっとも書き初めた時と、終る時分とは余程考よほどが違つて居た。文体なども人を真まね似るのがいやだったから、あんな風にやつて見たに過ぎない。

何しろそんな風で今日迄やつて来たのだが、以上を綜そうじう合して考えると、私は何事に対しても積極的でないから、考えて自分でも驚ろいた。文科に入ったのも友人のすすめだし、教師になつたのも人がそう言つて呉くれたからだし、洋行したのも、歸つて来て大学に勤めたのも、『朝日新聞』に入つたのも、小説を書いたのも、皆そうだ。だから私という者は、一方から言えば、他ひとが造つて呉れたようなものである。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

初出：「文章世界」

1908（明治41）年9月15日

※底本は、「談話」の項におさめた本作品の表題に、かぎ括弧を付けて示している。

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年4月27日作成

2003年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

処女作追懷談

夏目漱石

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>